

# 震災後 初めて米を出荷

まつした よしき  
松下 義喜 さん

(飯舘村・善仁寺門徒)



# 「自分の田んぼの米はおいしい」

飯舘村を支えてきた米作り。震災後、耕作ができず、荒れ果てた田が広がる。その中で、稲刈りを終えた田んぼがひとときわ目立つ。長年、村で米農家と牛農家を営んできた松下善喜さん(68)は今年、震災後初めて

村の水田で稲を育て、米を初出荷した。放射能除染のために1・5ヘクタールの田んぼの表層土を5センチ取り、土を入れた。収穫した米は8640キとなった。

「新しい土は、稲の生育が悪いと聞いていたので化

成肥料を使いながら稲の成長を見守った。思った以上に収穫できた。放射能検査は未検出で、無事に出荷できた」と安堵する(写真)。

松下さんは、震災後から福島市で避難生活を送っている。「避難した後、初めてお米を小売店で買って食べた。自分の田んぼで作れなくなったんだと、悲しかった」と話す。

避難指示が解けて村に戻れる兆し(きざし)ができたことから、2年前、村で再び米を作ろうと、福島市の家近くに小さな田んぼを求め、試験栽培を始めた。並行して、事業の10年計画を立て、「原子力被災12市町村農業者支援事業」に申請、トラクタや田植機などを買うための資金の75%の助成を受けた。「震災前に使っていた農機具で使えるものは使い、助成を受けて何とか再開にこぎ着けることができた。農政係長だった杉岡さんには力になってもらった」と振り返る。

「9年ぶりに米作りが再開できたのをかっこよく言え、昔の生業(なまわい)に戻すため、先祖から受け継いだ土地を守り伝えるため。でも、正直な思いは、やっぱり自分の田んぼで取れたお米はおいしいですから」と笑った。